

プラグマティズムと J.R. コモンズの理論

東京大学大学院経済学研究科博士課程 阿部晃大

1. 問題の背景と課題設定

アメリカ制度学派の代表者の一人に数えられる J. R. コモンズは、自身の制度経済学をプラグマティズムの議論を取り入れて発展させたものとして位置付けている (IE p. 155)。

プラグマティズムとコモンズの思想の関係については、先行研究で少なからず言及されてきたが、Y. ラムスタッド (Ramstad[1986], Albert with Ramstad[1997]) のように強い影響関係を確認できるとする論者もいれば、G. ホジソン (Hodgson[2003]) のようにコモンズはプラグマティズムの本質的特徴を取りこぼしているとする論者もいることから分かるように、十分に整理されているとは言えない。

なお、そもそもプラグマティズムとは、C. パースによって生みだされたとされる哲学的立場だが、何をその本質とみなすかは誕生当初から一致した見解があるわけではなく、パースの立場のみを正当とすることはできない。先行研究でも、パース的なプラグマティズムとは立場を異にする R. ローティのプラグマティズムの定義に沿って関連性に言及しているものもある (ex. Bush[1993], 高[2004])。また、(その多くが両者の関連性の整理を主題としていないため当然のことだが、) プラグマティズムの定義が曖昧なまま部分的な関連性に言及するにとどまっているものが殆どであり (ex. Gruchy[1947], 寺川[2015])、関連性を多面的に整理するためには、プラグマティズムの定義の明確化は欠かせない。

そこで本報告では、(コモンズが自著で積極的に評価しているプラグマティストである) パースと J. デューイのプラグマティズムの特徴を明確にしたうえで、それとコモンズの理論との関係について整理することを目標にする。

以下では、まずパースとデューイのプラグマティズムについてその特徴を簡明に説明する。続いて、そうしたプラグマティズムの大まかな特徴を踏まえたうえで、先行研究でプラグマティズムとコモンズの理論の関係についていかに扱われてきたのかについて言及して整理する。最後に、先行研究で指摘されてこなかった類似点について議論する。

2. パースとデューイのプラグマティズム概説

パースにとってのプラグマティズムは意味論であり、雑駁に言えば、認識過程の意義を習慣形成に見出す立場であった。認識を精神内部で完結する過程とはとらえず、行動のあり方と連続的に結びつく過程であるとするこの立場を保持するうえで、他にもいくつかの主張が前提されている。パースは、(精神内に所与の知識・感覚所与が与えられない為、) 不可謬の認識の基礎を得ることができないこと、問題が生じない限り人は習慣に基づいて行動すること、知性は上手く機能しない習慣を組み替える役割を果たしうること、実在のあり方と対応するような習慣を形成することで目的追求を実効的になす余地があること等

を前提としていた。そして、そうした立場がとられるが故に、認識の対象は、行動の帰結に影響がおよぶうる実際的な振る舞いの差異として具現化されうる何かに限定される。(＝認識不可能な物自体のようなものが認識対象になることの否定) また、不可謬の認識の基礎を得られない以上、確かなものを積み上げていく形で認識を洗練させていくことはできないので、認識過程は特定の状況で上手く機能しているように思われる習慣を問題が生じるまで暫定的に採用するという形で進展せざるを得ない。科学もまたそのような漸進的な改良過程を通じて展開されるが、実在と対応した知識(真理)の仮説であるための必要条件を規範として自覚的に受け入れる専門家集団による相互批判的な改良過程によってそのような知識の獲得を実効的に目指すことが出来るとされた。また、習慣形成の指針となる目的のあり方も生得的に世界の状況と調和的な目的を与えられているとは考えず、組み替えられる余地があるとされる。このように、認識が不完全なばかりか目的のあり方すら可変的な限界づけられた存在として人間を捉えつつも、知性によって状況を(保持されている目的に照らして)漸進的に改良出来ることを信じ、そのための規範を探ったのがプラグマティストたるパースの哲学的主題であった。

デューイもまた、パースの上記のような立場の殆ど全てを受け入れた思想家であった。ただし、彼はパースほど明確に真理(実在と対応した知識)の探究を他の種類の探究と区別することに重きを置かず、探究をより一般的に問題状況を解決状況へ転換する過程として捉えるにとどめた点は微妙に相違している。また、コモンズが指摘するように、彼とパースとの大きな違いは、より明示的に社会と社会における規範のあり方について考察した点にあった。パースにおいては異なる目的を追求する主体が影響を及ぼしあうような局面についての分析は見られない。他方、デューイは社会の慣習が個人の習慣形成のあり方に及ぼす影響について取り上げ、社会の慣習・道徳を知性による探究に基づいて事実即した形で改良するという倫理的主題を扱った。

3. プラグマティズムとコモンズの理論の関係の整理 ——先行研究に即しつつ——

コモンズは、科学の方法論としてのパースのプラグマティズムを踏襲するとしており、またデューイによるそうした倫理的分析の発展も(法的・経済的分析が必要な制度経済学としては不十分なものとどまるとしつつ)評価している。(IE p.150-155)

だが、具体的にどの立場を踏襲しているのかを必ずしも明確にしていなかったため、先述の通り、コモンズの理論とプラグマティズムとの連続性についての評価に混乱が生じている部分がある。本節では、前節で触れたパース・デューイ流のプラグマティズムの様々な立場について、その継承関係・類似性を先行研究に即しつつ整理していく。

まず、コモンズが明確にプラグマティズムから継承したとする一つの性格について。探究の対象を習慣形成にかかわる余地のある(状況毎に)将来具現化されうる行動(action)・振る舞い(behavior)に違いをもたらす何か(性質・関係・それらをもつもの)に限定す

る視点は明確に引き継いでおり、この特徴をもってプラグマティズムとは将来性 (futurity) であると彼独特の用語で表現している (IE p.152)。ホジソンは、コモنزの概念が過剰に行動主義的すぎる点を批判しており、これを一つの根拠にプラグマティズムとの類似を見かけ上のものとしているが (Hodgson[2003]p.557-559)、未来に具現化されうる振る舞いに焦点を絞るのはプラグマティズムの本質的特徴の一つであり、この批判はあたらない。

続いて、プラグマティズムが前提としていた習慣を軸とする人間観について。これについては、Albert with Ramstad[1997]がデューイの『人間性と行為』(Dewey[1930])とコモنزの人間観を丁寧に比較してその類似性を肯定しており、ここで付け加えることはない。人間が基本的に習慣(コモنز的に言えば習慣的前提 (habitual assumption) あるいはルーティーンとも言い換えられる)に依存しつつ、感情を介した問題発生の認知(コモنز的に言えば洞察 (insight) に従って)に伴って習慣の組換え過程が惹起され、習慣形成は知性的になす(コモنز的に言えば rationalization の)余地があるとする人間観はプラグマティストとコモنزに共通した立場である。ホジソンはコモنزが習慣形成過程の因果的分析を欠いたことからプラグマティストの習慣概念の継承に失敗したと批判しているが (Hodgson[2003]p.558)、コモنزがそうした因果分析を十分に主題化しなかったのは確かなものの、立場の類似性は十分に確認でき、失敗したという評価は妥当でない。

第3に、認識論的立場についても類似性を確認することが出来る。プラグマティズムは、認識の不可謬の基礎やその論理的帰結を蓄積していくことで知識を成長させるべきだとする論理実証主義やアプリオリズ的な立場を否定していた。これは、コモنزが外部からの刺激を受動的に知覚するものとして精神を捉えず、能動的に解釈する(分析し、意味づけ、価値づける)ものとして精神を捉える立場と一致する (IE p.153-154)。ミロウスキは、このようにいかなる判断も解釈が介在するとするパースのプラグマティズムの特徴を引き継いだ点でコモنزを評価している (Mirowski[1987])。そして、不可謬な認識の基礎を持たないがゆえに、公理からの論理的一貫した知識のみでは経験科学として不十分であり、仮説を形成してそれを実験・検証する過程を通じて暫定的に棄却されない仮説を生み出していくのが科学だとする探究観をコモنزは引き継いだ (IE p.156)。この点については、多くの先行研究が触れている (ex. Gruchy[1947], Ramstad[1986], 寺川[2015])。

第4に、問題状況を解消して新たな習慣・慣習を形成することに、探究の意義・目的を見出す立場についても継承関係を確認できる。(探究を問題解決と結び付ける点を継承したとする指摘は Gruchy[1947]に見られる。) コモنزは理論構築を未来について理解し、予測し、コントロールする為の活動として捉えており、それこそが科学的な理論すなわちプラグマティックな理論であるとしている (IE p.102)。科学と実践(知識と応用、精神と行動)を切り離して捉えるのではなく、両者が連続的であることを自覚して、未来の新たな制度の可能性を評価するためのモデリング (Ethical Ideal Type の形成) を政治経済学の課題として重要視したのは (IE p.741-748)、プラグマティズムの立場の自然な帰結である。

モデリングは過去の現象の生起を説明できればよしとされるものではなく、未来の制度形成に有効な示唆を与えられるか否かという観点から評価されなければならないということ、そしてそういう理由でも政治経済学のモデル構築には価値判断が混在せざるを得ないということ、それを自覚させてくれる点で、探究の目的に関するコモنزの議論は示唆的に映る。

最後に、探究が規範に自覚的な人々による集団的な相互批判過程を通じて行われることで、より良い事態の生起を期待できるとする態度についても継承関係を指摘できる。この点に関連した類似性も多く、先行研究で言及されてきた (Gruchy[1947], Mirowski[1987], 北川[2014], 寺川[2015]) 相互に利益が衝突し合う愚かで感情的で無知な不完全な人間が、ルールに即した集団的過程を通じて漸進的に事態を改善出来ることへの希望的態度は、コモنزの基本的な人間観・社会観(彼の用語では social philosophy)であるが (cf. IE p.682)、(真理の探究としての) 科学における集団的探究への信頼はプラグマティズムから継承していることを明確にしている (IE p.152-156)。北川が示唆しているように、(社会状態の価値判断を伴うような) 漸進的な制度改良過程への希望的態度についてもプラグマティズムの発想を継承している (少なくともコモنز自身の意図では) と言えそうだ。

4. 先行研究で見逃されてきた類似点

前節では先行研究に即した形で両者の関連性を整理した。本節では先行研究で見逃されてきた類似点として、具体的な文脈に即した経験的探究に従事する態度と共存する形で、そうした個別的な探究を助けるツールとして、(一定の対象に対して) 普遍的に適用可能な抽象理論を構築する志向を持っていたことを指摘したい。

コモنزは普遍的に適用可能な理論の構築に無関心であったと整理されることが多く (ex. Gruchy[1947] p.156)、そうした性格を持っていたことは強調されてこなかった。

しかし、彼はある種の対象の理論モデル (formula) が科学的であると言えるための条件として、その種の対象に関連する要素を漏れなく抽出し、要素相互の連関の仕方について抽象的な枠組み (elastic outline) を獲得していることを挙げている (IE p.738)。換言すると彼は、一定の種類の対象についての理論が科学的であるための条件を、その対象が属する種に普遍的に適用可能な抽象理論を構築できることに見出しているのだ。

そうした普遍性を持った抽象理論を獲得することは、個別具体的な対象の未来のあり方について評価する上で欠かせない。そうしたもの抜きには、現在の個別的な事態の記述や過去の事態の生起の説明以上のことをなすことは出来ないからだ。つまり、未来を見通すうえで適用可能な普遍的な抽象理論への志向という態度は、未来の事態の漸進的な改良を探究の意義として持ち出すプラグマティズムの自然な帰結なのだ。

実際、パースやデューイのプラグマティズムは、人間やその認識・探究過程の一般的な性質・形式についての抽象理論であるし、パースは特殊な事態の解明には抽象的な理論の獲得が有効であるとして、経験一般から抽象理論を導出することの重要性を強調しており、

抽象理論の確立が社会科学の発展を助けるという見通しすら示している（CP.6.2）。

コモンズがパースのこうした発想を引き継いだ直接的な証拠はない。しかし、第一に、彼がパースの（真理の探究としての）科学観を引き継ぐとした上で、一定の対象についての科学的な理論モデルであるための必要条件として、その種の対象に関わる要素とその関連性に関する抽象的な枠組みの獲得を挙げていること、第二に、プラグマティズムの探究観の帰結としてそのような発想が位置づけられることから、普遍的に適用可能な抽象理論への志向性に関する両者の類似性は疑う余地がないように思われる¹。

ここでコモンズの議論が一定の対象について普遍的に適用可能な抽象理論となっていることを詳細に論じることは出来ないし、その準備もない。しかし、主張の裏付けのために簡単にそうした性格について触れておきたい。

コモンズの理論は、プラグマティストから受け継いだ一般的な人間観の下、（それが置かれた環境がある程度の安定性を持つ限りにおいて一定の事態の生起を帰結するという意味で）目的志向的なシステム（いわば意志的運動体であり、コモンズの言う **Going Concern** もそれに含まれる）が多数存在する世界として社会を捉えている。目的志向的な運動体が一定の事態の生起を帰結しうるのは、その運動体を構成する事物の集団的な行動・振る舞いが一定の（可変的な）ワーキングルールに沿って生み出されるからに他ならない。ルールに沿った集団行動が一定の事態を生起するように統御的に働くような一般的形式を備えたシステムが **Going Concern** だとも言える。（人間の一般的特性により、魔術的に望ましい事態を生起させることは出来ず、漸進的な改良・統御過程を通じて実現される他ない）

そうした形式を備えた意志的運動体が相互に影響を及ぼす社会である以上、どんな事態が価値づけられるか、どのような影響関係（取引）の種類が問題になるか、どんな要素がその運動の決定に関わるか、こうした一般的論点に関わる概念が彼の理論を構成している。

5. おわりに

ここまで、プラグマティズムとコモンズの理論との関係について議論してきた。従来の先行研究は、プラグマティズムの定義を曖昧なままにしたりコモンズに影響を及ぼしたプラグマティズムから変形されたプラグマティズムの定義を用いたりしていた点や部分的な関連性の指摘にとどまっていた点で、両者の関係の整理としては不十分な面があった。本稿では、パース・デューイ流のプラグマティズムの定義を明確にしたうえで、コモンズ理論との関係性を多面的に整理することが出来た。また、従来の研究では指摘されてこなかった類似点について明示することもできた。コモンズが普遍性を備えた抽象的な理論構築を志向する側面も持っていたことを明確にすることは、コモンズ理論の理解や現代的適用においても有効な示唆を与えるものと期待できる。その検討は別稿の課題としたい。

¹ この態度が具体的な文脈に即した探究を重視する立場と両立することは強調しておきたい。

6. 参考文献

- Albert Alexa and Yngve Ramstad (1997) “The Social Psychological Underpinnings of Commons’s Institutional Economics: The Significance of Dewey’s *Human Nature and Conduct*”, *Journal of Economics Issues*, 31(4): 881-916.
- Bush, Paul D. (1993) “The Methodology of Institutional Economics: A Pragmatic Instrumentalist Perspective” in *Institutional Economics: Theory, Method, Policy*. Edited by Marc R. Tool, Kluwer Academic Publishers Boston/Dordrecht/London.
- Commons, John R. (1924 = 1995) *Legal Foundations of Capitalism*, with a new introduction by Jeff E. Biddle and Warren J. Samuels, New Brunswick and London : Transaction Publishers. (引用時 LF ページ数)
- Commons, John R. (1934 = 1990) *Institutional Economics: Its Place in Political Economy*, 2 vols, New Brunswick: Transaction Publishers. (引用時 IE ページ数)
- Dewey, John. (1930) *Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Philosophy*. New York, Modern Library. 河村望訳『「デューイ＝ミード著作集」3 人間性と行為』人間の科学社 1995.
- Gruchy, Allan G. (1947) *Modern Economic Thought: The American Contribution*, New York PRENTICE-HALL, INC.
- Hodgson, Geoffrey M. (2003) “John R. Commons and the Foundations of Institutional Economics”, *Journal of Economic Issues*, 37(3): 547-576.
- Mirowski, Philip (1987) “The Philosophical Basis of Institutionalist Economics”, *Journal of Economic issues*, 21(3): 1001-1038.
- Peirce, Charles S. [1931-58] Hartshorne, Charles and Weiss, Paul ed. *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol. I -VIII*, Belknap Press of Harvard University Press. (引用時 CP.巻数.パラグラフ)
- Ramstad, Yngve (1986) “A Pragmatist’s Quest for Holistic Knowledge: The Scientific Methodology of John R. Commons,” *Journal of Economic Issues*, 20(4): 1067-105.
- Rutherford, Malcolm (1983) “J. R. Commons’s Institutional Economics”, *Journal of Economic Issues* 17 (3) : 721-44.
- 北川亘太(2014)「J.R. コモンズ『制度経済学』の構築過程——政治経済学における主権の位置づけを中心に——」進化経済学会第18回金沢大会発表論文.
- 高哲男(2004)『現代アメリカ経済思想の起源——プラグマティズムと制度経済学』名古屋大学出版会.
- 寺川隆一郎 (2015)「ジョン・R・コモンズと『アメリカ精神』——エリック・フェーゲリンの議論を手掛かりに——」*相関社会科学* Vol.24.